

「夜叉王」であり、大惡に対する古仏の灌頂は「世尊」の法王位を尊遷しようとする「夜叉神」の反逆であろう。

侵略者がおのれの行為を正当化するために作り出したのが差別観で、差別観から生み出されたのが「夜叉」であり、「夜叉」を生み出すために作り上げたのが「世尊」であろう。それならば、「世尊」のほうから差別の虚妄であることを宣言せめかぎり、すなわちその差別を解消せめかぎり、「世尊」と「夜叉」のあいだに対話の成立する場はない。

「世尊」の微笑は、差別の虚妄を宣言しようとする決意の表現であろう。黄金の山のゆめくようだ、ということばは危機的表現として微妙である。わたしもまたこの教えを説くことは、「世尊」たることをやめてわたしも古仏のひとりとなろう、ということであるに違いない。

楞伽經は、ここで突然、ラーヴァナを出して来た、何の説明もなく。読者は訝るだろう。楞伽教団の人たちにとって、それがあまりにも身近かで、説明せねばならぬものとは夢にも思わなかったろう。ヨーロッパ人がキリストについて語るときいちいち説明したりせぬように。

ラーヴァナを、さきに、大惡と結びつけた。読者はそれを訝るだろうか。気づいて読めば、魏訳楞伽經ならこれからさき到るところでこれを証してくれるはずである。だが、ここでは二つのことを説明しておこう。

第一 ラーヴァナをいうのに、夜叉王上首、という。夜叉王といえはすむラーヴァナに上

首をつけるのは、大慧が菩薩の上首であつたことに対応させてのことなのだ。仏心品^{きんしん}に字平等の説がある。拘留孫仏などの過仏と釈迦牟尼仏とは仏字を共有するので平等なのだと説く。今日いう水平思考の一つに当るだろうが、そのような思考を説く楞伽は、ラーヴァナは大慧だ、と説くかわりに、上首をふたつの名に共有させたのだ。

第二 名において重要な共通性がある。大慧の原語は、マハーマティ *Mahamati* である。マハーは大の意。マティには、知性・理解などとともに、献身・祈禱・強信・熱望などの意をふくむ。ラーヴァナの語源に熱望の意をふくむことはすでにのべた。ラーヴァナは夜叉王である。夜叉の原語はヤクシャ *Yakṣa* で、尊敬、勇健、祠祭などの意をふくむ。大智海に帰敬偈を捧げる本経の中心人物が大智 *Maṅgalajit* でないことはおもしろいが、それがラーヴァナの如法の姿であればこそパセティックな大慧がその名に選ばれたのであろう。

8 尔時。羅婆那夜叉王。以仏神力。聞如來聲。時。婆伽婆。離海竜王宮。度大海已。与諸那由他無量釈梵天王諸竜王等。圍繞恭敬。

そのとき、ラーヴァナ夜叉王は、仏の神力で、如來の声を聞いた。同時に、バガヴァツトは、海竜王宮を離れ、大海をわたりおわった。もろもろのナユタ無量の帝釈・梵天王もろもろの竜王らに、とりまかれ敬礼された。

「世尊」が「世尊」たることをやめようと決意したとき、「世尊」は「世尊」たる境界を

脱して如来となる。如来とは眞理から来た人Vであり、へありのままの眞実に到達したもののVである。

ラーヴァナ夜叉王は、仏の神力によって、如来の声をきく。仏とはたれか。ランカーの古仏か。仏位についた大慧か。あるいは「世尊」たることをやめた如来か。いずれでもよい。眞実の生きるところには仏がいて、仏神力があるのであるうから。

すばらしいのは、同時表現の記述法である。尔時に時をかさねる用法について、さきにも触れたが、ここもまたそれによって、ラーヴァナの聞如来声とバガヴァットの離海竜宮^ミとが同時進行なることを示し、度大海已によって「世尊」は「世尊」から離れ、すなわち婆伽婆から離れ、以後、魏訳『入楞伽經』に訳語婆伽婆はあらわれない。

9 尔時・如来。觀察衆生。阿梨耶識大海水波。為諸境界猛風吹動。乾識波浪。隨縁而起。そのとき、如来は、衆生を觀察した。アーラヤ識の大海の水波は、もろもろの環境世界の猛風に吹き動かされた。乾識の波浪は、縁によって起っていた。

「世尊」が望み見たとき、マラヤ山のランカー城は、遙かであった。觀察すると、その城はかがやき、たのしげで、ゆらめく黄金の山であった。「世尊」が如来となつてかえり見たとき、眼前にいろのは、もろもろの生ある者たちであった。衆生を觀察すると、かれらの世界でアーラヤ識と名づけている、心的大海の水波が、暴風に吹かれて荒れ狂っている。

「世尊」の如来への轉換は、「世尊」が世尊に返ったにすぎない。しかし、世尊を「世尊」に閉じこめることによって、人間を「帝王」とし「夜叉」としてきた人たちにとって、大海に暴風雨がふきさぶように感ぜられたろう。「夜叉」の消滅には耐えろとしても「帝王」の消滅に耐えられようか。「世尊」も「帝王」も「夜叉」も、人の妄執のえかく幻にすぎぬ。妄執を離れた立場からは幻とみえても、妄執のなかにいるものには、やはり暴風雨である。

10 尔時。羅婆那。夜叉王。而自嘆言。我応請如来。入楞伽城。令我長夜。於天人中。与諸人天。得大利益。快得安樂。

そのとき、ラーヴァナは、夜叉王であつた。で、みずから嘆じていう。「わたしは如来におねがいしよう。ランカー城にはいつていただき、われらの長い暗い夜を、神や人の中で、もろもろの人や神とともに、大利益を得て、すみやかに安樂にさせていだこう」

「世尊」が如来に轉換したとき、ラーヴァナは「夜叉王」であることから解放されるはずであつた。だが、ラーヴァナは「夜叉王」のままである。如来はつねに如来である。如来である世尊を「世尊」としたのは人の妄執であつた。「世尊」が世尊に返つても、世尊を「世尊」としたがる妄執がただちに人間からなくなるわけではない。それは「楞伽經」が書写された千五百年まえだけのことではない。

ハインドではいせん、新しいカースト制度が残っている。故マハトマ・ガンジー翁は、不

可触賤民をハリジャン（神の子）と名付け、差別の撤廃をうたった。だが、各地でハリジャンに対する虐待は跡を断たず、カンジー翁の遺志は完全に裏切られた形である。つい最近もインド南部のアンドラ・プラデシュ州クダバ地区の村で、ハリジャンの住む四十七軒が深夜焼き打ちに遭い、二百人以上が焼け出された。ハリジャンの家で飼っている牛が上級カーストの農民の畑で草を食べていたという、たったそれだけのことで、ひどい報復を受けたのである。……アーメダバド市では入院中の妊産婦が「さわられるくらいなら死んだほうがましだわ」とハリジャン出身の医師による手術を拒否した。……カンジー首相もこのほど「国民みんながハリジャンに対する態度を変えるべきだ」と大キャンペーンを呼びかけたが、国民の側からはそれに二たえる動きはない。ニューデリーのジャムナ川付近のゴミ捨て場で、ハリジャンの子どもたちがゴミをあさっていた。その上には、やはりゴミをあさるカラスやワシが何十羽も舞う。ハリジャンたちの将来は、まだまだ暗いといわねばならない。V

一九七三年十二月十七日
朝日新聞・夕刊

それはまた、しかし、現代のインドだけのことでもない。
ラーヴァナひとりが「夜叉」から抜け出しても、「夜叉」は無数にあり、「夜叉」を作り出すのが「帝王」や「人」であるだけでなく、「夜叉」もまた「夜叉」のうちなる「夜叉」を作る。

ヴェッダを夜叉と呼んだシンハラのは、
「人」と「獅子」との混血児であった。かれは父なる「獅子」を殺し、王位を「人」なる母の新夫に与えたが、「人」の国を去り、やはり「獅子」の子なる妹と結婚するほかなかった。おそらく「人」からも「獅子」からも忌避さ

れたためであらう。「獅子」の孫ウィジャヤに犯されたウェッタの女クワンナーの生んだ子、すなわちブリンダーの祖が兄妹結婚しなければならなかったのも、「獅子」からも「夜叉」からも差別されたためであらう。

ランカー城とは、眞実如法の仏国土だが、同時に幻のギリ島であり、差別の根の国である。ランカーからギリ島をキリ離し、閉鎖することによって、差別がなくなりはない。ランカー城に如來をまねき、神をまねき人をまねき、神と人と夜叉とが、夜叉の長夜の闇を共有し、如來の眞実によって、差別の虚妄、ギリ島の幻なることを照明するほかに、根の国ランカー城を消滅させるすべはない。根の国が消滅しないかぎり、夜叉にも、人にも、神にも、安樂はなく、如來もまた、根の国ランカー城が存在するかぎり、ふたたび「世尊」の鉄塔に閉じこめられ、世界に「夜叉」を生みつづけるであらう。

11 尔時。楞伽城主羅婆那夜叉王。与諸眷屬。重花宮殿。至如來所。与諸眷屬。從宮殿下。遶仏三匝。以種種伎樂。獻於如來。所持樂器。皆是。大青因陀羅宝。而用造作。大毘琉璃馬瑙諸宝。以為間錯。無価色衣。以用纏裹。以梵声等無量種音。歌歎如來一切功德。而說偈言。

そのとき、ランカー城主のラーヴァナ夜叉王は、もろもろの眷屬と、花の宮殿に乗り、如來のまえにゆき、もろもろの眷屬と、宮殿より下り、仏をめぐること三たび。種々の伎樂で如來を樂しました。もつてきた樂器は、みな大青因陀羅宝で作られ、大毘琉璃

馬瑙などの諸宝がちりばめられ、価もしれぬ色絹でつつんである。ブラーマ・スヴァ
ラなど、無量の音調で、如來の一切の功徳を歌歎し、偈を説いていう。

花の宮殿にわたしは祇園祭の山鉾を見る。そうして、そこから下りて、仏を三たびめぐつ
て歌うラーヴァナ夜叉王とその眷屬に、伎樂面をつけたひとたちの舞樂を見る。入楞伽の入
の原語は *Avatambin* で、降下・顯現・化身の意味をもつ。如來のランカーへの降下は、また幻
の舞台への顯^現であり、仮面をかぶった俳優の登場でもある。それを登るといわないのは、聖
なるものの化現けえではあるうが、ラーヴァナとその眷屬さえ下りる。その舞台は、おそらく
く、見物席、すくなくとも観客の主たる人が占める位置よりは、低くしつらえてあったので
あろう。

初期の楞伽教団は劇団かと仮説で推測した。その根拠の一つがこの節である。他の經典で
も仏に歌舞を捧げることは珍らしくないが、そのとき樂器について、ここでのように詳しく
のべてはいないようである。樂人の目は樂器にさといものである。田辺尚雄の次のことは
かつて拙稿「負薪」一九六六年の注に引いたが、

△印度の古樂器として珍らしいものはラバナストロンと名附ける樂器で、それは弓を以て
摩擦して鳴らすのである。これは今から五千年位前のセイロン島の王ラバノンに依て發明さ
れたと称されて居て、印度の古書にも既に其名が記されて居る。恐らく世界の弓樂器の最も
古いものらしく、後のヴァイオリンなどの先祖をなすものと考えられている。V

東洋音樂論

ラバノンにはラーヴァナである。マトウラのヒンドゥー寺院の石刻に音楽をかなでる夜叉女たちの像があり、その一人のもつ楽器はラバナストロンでもあろうか。夜叉の男は醜悪なるも女は極めて姝美、とあるのを讀んだことがあり、それが何であつたか、いま思い出せないが、マトウラの夜叉女はまゝたくその言葉の通りである。『大智度論』²には、地行・虚空・宮殿飛行の三夜叉をあげ、地行夜叉は歡樂・音楽・飲食を得、虚空夜叉は大力あつて風のごとく、宮殿飛行夜叉は種々の娛樂便身の物あり、という。それらを魔力とも神通ともしてよいが、サーカスをふくむ劇団の技芸と考えて齟齬はない。言葉の表裏を極度に活用するところ、演劇に関する譬喩の多いところ、いずれも楞伽教団と劇団との結びつきを思わせるものである。なお、魏訳の訳者ボディールチが神通力にたけたことを伝に記すが、奇術に類するもので、あるいはかれはインドで楞伽經を學ぶとき、それらをも合せて習うけたのかもしれぬ。盧迦耶陀品でかれが種種并説とするところを唐訳は呪術・詞論とする。梵本はそこを *Antahpratihāna* とする。魏訳の原典もそうだったとすると、唐訳の方が正確だ。ここは密呪を使って儲ける順世外道をそしるところだから、密呪を伝道に利用していたであろうボディールチにとって、あらわに訳すことは都合よくなかった、とも考えられる。しかしました。劇団員として奇術を演じていた人ならば、世間のあやしみおそれる密呪も并説の一種と見くだしていたとも考えられる。

いずれにしても、今ここでラーヴァナらが歌うのは、姝美な夜叉女の管絃樂にあわせて、高低さまざまな大合唱であらう。

心具於法藏 離無我見垢 世尊說諸行 內心所知法 白法得仏身 內身所證法 化身示
化身 時到入楞伽 今此楞伽城 過去無量仏 及諸仏子等 無量身受用 世尊若說法
無量諸夜叉 能現無量 欲聞說法声

心を存在の蔵に具え、無と我の偏見から離れよう。世尊が説かれるもろもろの現象は、心の内部で知る存在。真理が人格化した仏身は、身の内部で證明する存在。化身の顯示なる化身が、時いた、てランカーに入る。今このランカー城は、過去の無量の仏と、もろもろの仏の子らが、無量の仏身を受けたところ。世尊がもし法を説かれるなら、無量のもろもろの夜叉も、無量の仏身を現じましょう。説法の声をお聞かせください。

この偈は楞伽經の思想の摘要といふべき重要な句だが、唐訳といちじろしく異なる。唐訳第一句は、心自性法藏へ心の自性は存在の蔵である。心はそれ自体の性格が法藏だ、と断定するが、魏訳は、心は法藏なる状態において機能をはたす、と機能を規定するのだ。第二句、無我離見垢へ無我ならば偏見から離れる。一見このほうが通りがよい。だがそれならば我を認めた上で否定することになる。魏訳は、無と有とを対立させる無見からも我見からも離れようといっている。第三、四、五、六句、證智之所知、願仏為宣説、善法集為身、證知常安樂へ証明された智者のお知りになったことを、願わくは仏よお説きください、真理は集つて仏身となり、証明された智者は常に安樂である。仏の功能の讃嘆にとどまるが、魏訳では世尊の説く諸行は世尊内心所知の法であるとともに聞くものの内心所知の法であることをし

含みとして、微妙な思想の表現として極めて的確である。第七、八句、变化自在者、願入楞伽城へ变化自在なる方よ、願わくは楞伽城におはいりください。变化するのは仏だけだ。魏訳は夜叉も化身なることを現わし得ている。第九、十、十一、十二句、過去仏菩薩、皆曾住此城、此諸夜叉衆、一心願曉法（過去の仏菩薩は、みなかつてこの城にとどまられた、こののもろもろの夜叉たちは、一心に法をきこうと願っています。仏と夜叉とは切り離されていて、教えるものは仏、教えられるものは夜叉である。終じて唐訳は、この上下関係をくすすまいとする態度がみえ、魏訳には、見るものと見られるものとの相関関係の弁証法ともいうべきものが、あますところなくすくいとられている、と感ぜられる。

13 尔時、羅婆楞伽王、以都吒迦種種妙声、歌歎如来諸功德已、復更以伽他妙声、歌歎如来而説偈言、

そのとき、ラーヴァナ・ランカー王は、トータカ調の種々のよい声で、如来のもろもろの功德を歌歎しおわり、さらにガーター詠唱調で、如来を歌歎し、偈を説いている。

トータカ *Totaka* を字書は喧嘩口調と説明する。そのままここにあてはめることはできぬが、かなりはげしい早い調子だったのであろう。ガーター詠唱の *gāthā* は敘事詩朗詠調だが、インド音楽に無知なわたしにはこれ以上のことはいえぬ。以下の長い偈が歌劇としての諸仏品の中心で、これがストーリーの前段を重ねながら、後段に渡す役割をもちいたす。

14 如來於七日 大海惡獸中 渡海至彼岸 出已即便往 羅婆那王共 妻子夜叉等 及無量

眷屬 大智諸大臣 叔迎婆羅那 如是等天衆 各各悉皆現 無量諸神通 乘妙花宮殿

俱來到仏所 到已下花殿 礼拝供養仏

如來は七日間、大海の惡獸中にいて、海を渡り彼の岸にいたり、上つてそこにとどまられた。ラーヴァナ王と、妻子の夜叉たち、と無量の眷屬、大智ある諸大臣、シユツカやバーラナ、このような神たちは、おのおのことごとく、無量の諸神通を現わし、妙なる花の宮殿に乗り、ともに仏のみもとに來り、到着して花の宮殿より下り 仏に礼拝し供養する。

ラーヴァナの大臣を大智とするのは偶然ではないであろう。シユツカ^{Shukra}は、詩人、ものまね・こわいろ。バーラナは支之^{Shi}手か。唐訳は娑刺那^{Saranga}ラーナ^{Saranga}で輕業の大股開き、あるいは音をたてる人などの意をもつ。婆と娑はまぎれやすい字だから、娑のほうがよいかもしれない。天衆は一本に天衆とし、これまでの文脈からいえば天衆がいだろう。ただ、請仏品ではこの偈が最も古い部分であろうから、魏訳の原典が出てくるまでは、決定は保留したい。

15 依仏住持力 即於如來 自說己名字 我十頭羅刹 願重哀愍我 及此城衆生 受此楞伽

城 摩羅耶宝山 過去無量仏 於此楞伽城 種種宝山上 說身所證法 如來亦庇尔 於此宝山中 同諸過去仏 亦說如是法 願共諸仏子 說此清淨法 我及楞伽衆 咸皆欲聽

聞

仏のたもつ力により、如来の前にけき、みずからおのれの名まえをいう。わたしは十頭羅刹です。どうかわたしとこの城の、衆生にあわれみを垂れ、おうけく下さい。ランカー城、マラヤの宝山を。過去の無量の仏たちは、このランカー城の、種々の宝山上で、身もて證明した法を説かれた。如来もまたかくて、この宝山中において、もろもろの過去の仏と同じく、またそのような法を説かれるでしょう。どうか諸仏の子らと、この清淨の法を説いてください。わたしとランカーの者どもは、ことごとく聴聞いたしましょう。

16

入楞伽經典 過去仏讚歎 内身智境界 離所説名字 我念過去世 無量諸如来 諸仏子
圍繞 説此修多羅 如来於今日 亦充為我等 及諸一切衆 説此甚深法 未來諸世尊
及諸仏子等 於此宝山上 亦説此深法

ランカーに入る經典は、過去仏が讚歎された。内身智の境界は、説かれる言語文字を離れている。わたしは念う過去の世に、無量の諸如来が、諸仏の子らにかこまれて、このスートラを説かれたのを。如来はきよう、またきつとわれらと、もろもろの一切の衆生のために、このいと深い法を説かれよう。未来のもろもろの世尊、と諸仏の子らも、この宝山上で、またこの深い法を説かれるだろう。

内身智の境界、というののわかりにくい。 *Pratyātma-gāti-gocara* の訳語として、 *Pratyātma*

は逆行・還帰、Gati は進行、Gocara は心の動く範囲といふほどの意だから、自照する精神の場としての身体、といふほどのところを指すのであろうか。言語文字を離れたものを、言語文字であらわそうとすることは、はじめから無理なことである。だがその無理を承知で表現にはげめ、というのもこのストラ（経典）の教えるところである。

魏訳はくりかえしが多い、読者は倦怠する、とよくいわれる。それはこの経典を黙読するものときめてかかるからである。歌劇であるならば、人形劇であるならば、音楽がはいり、しぐさがはいり、舞いがはいり、それを歌でつらねて、活字の十行に三十分や一時間ばかりである。テレビの「ひょっこりひょうたん島」や「八大伝」を台本で読めば、もったくりかえしが多いはずである。それを除けば舞台がなりたため。

楞伽経はくりかえしているように、ラセン運動に似ていて、その運動の中で、ことばでいえぬそれをいふと気づかせるように組んである。

この一節、これまでの過去と現在から、さうに窓をあけて未来を展望し、ここで見事に三世が四環した。

17 今此楞伽城 微妙過天宮 牆壁非土石 諸宝羅網覆 此諸夜叉等 已於過去仏 修行離

諸過 畢竟住大衆 內心善思惟 如実念相応 願仏憐愍故 為諸夜叉説 願仏天人師

入摩羅耶山

いまこのランカー城の、微妙さけ天の宮殿以上です。牆壁は土や石でなく、しろしろの

宝珠のカーテンで覆っています。二二のもろもろの夜叉たちは、過去仏のもとで、修行し、もろもろの過ちから離れ、ついに大乘の立場に住し、内心よく思惟し、如実にその念いは相応している。どうか仏よあわれんで、夜叉たちのため説いてください、どうか仏よ神と人の師よ、マラヤ山にお入りください。

夜叉及妻子 欲得摩訶衍 寶耳等羅刹 亦住此城中 曾供養過去 無量億諸仏 今復願
 供養 現在大法王 欲聞内心行 欲得摩訶衍 願仏憐愍我 及諸夜叉衆 共請仏子等
 入此楞伽城 我所有宮殿 妻子及眷屬 宝冠諸瓔珞 種種莊嚴具 阿耨迦園林 種種皆
 可樂 及所東花殿 施仏及大衆 我於如來所 無有不捨物 願大牟尼尊 哀愍我受用
 我及諸仏子 受仏所說法 願仏垂哀愍 受我受用説

夜叉と妻子は、マハーヤーナを得たいと思っています。クンバカルナラの羅刹も、またこの城中に住み、かつて供養しました過去の、無量の諸仏に。今また供養したいのです。現在の大法王に。内心の行を聞きたく、マハーヤーナを得たいのです。どうか仏よあわれんでくださいわたくし、ともろもろの夜叉たちを。諸仏の子らと、このランカー城に入られて、わたくしのもっている宮殿、妻子と眷屬、宝冠もろもろの瓔珞、種々の莊嚴具、アソカの園林、種々のすべての娛樂品、および乗りものの花の宮殿を、仏と大衆に施します。わたくしは如來に対し、喜捨せめ物はありません。どうか大牟尼尊よ、わたくしをあわれんでお受けください。わたくしと諸仏の子は、仏の説かれる法を受けましょう。どうか

仏よあわれみを垂れ、わたしのために受けお説きください。

マハーヤーナ Mahāyāna は大衆。クンバカルナ Kumbhakarṇa はラーヴァナの兄弟。あるいは目から水を出すような奇術師であるかもしれない。アソカの園林は Aśokavanika アシエカ樹の林で、『大史』に八正覺者は更にナーガの柵から北方に赴かれ、アソカの柵中に坐して人々に法をお説きになりました。Vijaya という柵をさすにちがいない。この章は天愛帝須 Deva-nampiyatissa が大寺を寄進することを記すが、第三の過去仏迦葉 Kassapa が支那多 Jayantada という王とその弟との間に起った殺戮戦を止めるために来島し、王がマハーサーガラ園をさげるといふ話が挿入され、アソカ柵はその園中の林なのである。第四の来島仏が「世尊」だから、「世尊」来島以前のランカー王ラーヴァナは、あたかもジャヤンタに相当する。ジャヤンタが弟と共にカッサパ仏を迎えることはまた、ラーヴァナが今、弟のクンバカルナと共に仏を迎えることに、対応するだろう。

19 尔時三界尊 聞夜叉請已 即為夜叉說 過去未來仏 夜叉過去仏 此勝宝山中 憐愍夜

叉故 説内身證法 未來仏亦尔 於此宝山中 為諸夜叉等 亦説此深法 夜叉此宝山

如來修行人 現見法行人 乃能住此處 夜叉今告汝 我及諸仏子 憐愍汝等故 受汝施

請説 如來略答竟 寂靜默然住

そのとき三界の尊い方は、夜叉の請いを聞きおわり、ただちに夜叉のために説かれた。

過去と未来の仏を。夜叉よ過去仏に。このすぐれた宝山中で、夜叉をあわれむがゆえに、内身に證明した法を説かれた。未来仏もまたそのように。この宝山中で、もろもろの夜叉たちのために、またこの深法を説かれよう。夜叉はこの宝山中で、如実に修行する人、現われ現わす法行の人、それなればこそここに住むことができる。夜叉よ今あなたに告げる、わたしと諸仏の子らは、あなたたちをあわれむがゆえに、あなたの布施と懇請を受けて説こう。如来はほほ答えおわって、しずかにだま、ておいでになる。

夜叉此宝山、如実修行人、現見法行人、乃能住此処、は読みにくい。次のようにも読める、夜叉よこの宝山は、如実に修行する人、現に存任と現象とを見る人、であってはじめてここに住むことができる。

こう読むならば、ここは宝山についてのみの説明である。唐訳はこれに近い。拙訳はここです。宝山と夜叉との関係をのべている、とみたのだ。楞伽經の梵文は、語格のはっきりしない奇妙な文章だそうである。最初プリンダーのことばだ、たのを梵語に訳したためではないかと想像するが、さらに、表裏のある舞台ことばであることにも関係があるうと推測する。拙訳は一方に片寄せすぎた嫌いがある。舞台では、如来役がバリトンで場所としての宝山の方にアクセントをつけて歌い、合唱隊は混声で、夜叉の方にアクセントをつけて低声を流しているのかもしれない。そのような想像を禁じえないほど、魏訳の文章は重層的である。

羅婆那羅刹 奉仏花宮殿 如来及仏子 受已即皆衆 羅婆那夜叉 亦自乗花殿 以諸姪
 女衆 衆仏到彼城 到彼妙城已 羅婆那夜叉 及其夜叉妻 夜叉男女等 更持勝供具
 種種皆微妙 供養於如来 及諸仏子等 諸仏及菩薩 皆受彼供養 羅婆那等衆 供養説
 法音 觀察所説法 内身證境界 供養大慧士 数数而請言

ラーヴァナ羅刹は、仏に花の宮殿をたてまつった。如来と仏の子らは、受けてただちに
 みな乗った。ラーヴァナ夜叉、もまたみずから花の宮殿に乗り、もろもろの伎女の音楽
 で、仏を楽しませつつ彼の城に到る。彼の妙なる城に到着すると、ラーヴァナ夜叉、と
 その夜叉の妻、夜叉の男女ら、またすぐれた供養の品の、さまざまにみないみじいもの
 を、如来と諸仏の、子らにささげる。諸仏と菩薩は、みな彼の供養をうけた。ラーヴァ
 ナたちは、法を説く人に供養して、説かれる法が内身に 證明された境界なることを観
 察した。大慧大士に供養して、ことばを重ねて請うていう。

この劇の主役のラーヴァナは、前に夜叉王の、後に菩薩の、仮面をかぶり、かれの舞うに
 つれて、あるいはラーヴァナが、あるいは大慧が、観客におもてを見せ、照明のたいまつが
 一つ一つと消えてゆき、観客が夢とうつつの間をさまようなかで、主役がバスで次のように
 独唱するのを聞くだろう。

21 我与夜叉衆 及諸仏子等 一切諸曉者 咸請仁者問 大士説法勝 修行亦最勝 我尊大